

Showa Style

都築響一 編

再編 建築写真文庫



僕たちのイエスタデイ・ワンス・モア
伝説の『建築写真文庫』79冊が
いま、よみがえる——編・都築響一



ずいぶん長いあいだ、昭和30年代、40年代のB級日本映画を集めてきた。CMでずたずたに切られテレビ放映されたのをマメに録画したり、中古ビデオ屋でレンタルビデオ店から流れた、パッケージの色褪せたテープを探したり。ケーブルテレビとハードディスク・レコーダーが登場してからはダビングのチャンスが増し、いまでは1000枚以上のDVDが、いつか観てもらえる日を待って書棚に眠っている。

有名監督とも、スター俳優とも無縁。ストーリーに意外性も緊迫感もなければ、演技も撮影も投げやりなルーティーン・ワーク。いちどはビデオになっても、すぐに廃盤、二度と陽の目を見ない。そういう映画を観ることとは、作品鑑賞ではなく、時代の空気感にひたるよろこびだ。単にその時代の、その場所で撮影されたというだけの、なんの思想も意志もコンセプトもない、観たそばから忘れ去られる娯楽作品。そっ

ちのほうに、ときには大上段に構えたドキュメンタリーよりも、はるかに時代のリアリティが映し出されていたりする。

本書は昭和28(1953)年から45(1970)年まで、17年間にわたって出版された全145巻の『建築写真文庫』から、商業・公共建築に分類される79巻を選び、再編集してまとめたものである。残りの66巻は住宅建築に分類されるものなので、それも近い将来にご紹介できる機会をと思っている。

詳しくは後記に述べるが、建築家・数寄屋研究者にして、稀代の趣味人であった北尾春道(きたお・はるみち)という、たったひとりの人間によって取材、撮影、編集された建築写真文庫には、本書に掲載されたものだけで300件以上、全145巻を通してみれば、おそらく千数百の物件が、この恐るべき好奇心と健脚の持主によって記録されている。しか

しそのうちで店舗として有名などころはあっても、建築作品として、近代建築史に残るような傑作も、有名建築家による作品も、実はほとんど収録されていない。

喫茶店、洋食屋、キャバレー、ナイトクラブ、蕎麦屋、鮎屋、ガソリンスタンド、美容院、瀬戸物屋、電器屋……。徹底した無名性と、市井へのまなざし。というかストリート・レベルへの執着。神社仏閣建築を手がけた父のもとに生まれ、伊東忠太の教えを受け、吉田五十八と交流し、関東関西の数寄屋建築、茶室についての実測調査に明け暮れるという、言うなれば建築界のエリート・コースを歩んできた専門家中の専門家であり、茶人を援助するほど茶道や、花柳界にも造詣が深い粋人であった北尾春道にとって、多数の著作のうちでも異色の内容を持つ建築写真文庫とは、いったいどのような意志から生まれたものだったのだろう。17年間にわたって145巻も

のシリーズを制作した背後に、いったいどんなモチベーションが働いていたのだろう。おそらくテーマ設定から物件の選択、撮影交渉、さらには一冊ごとの構成からデザインにいたるまで、ほとんどひとりで手がけたであろう制作スタイルは、思い入れが濃く反映された解説文や、写真キャプションからも容易に読み取れる(本書ではそのうちからごく一部分を抜粋、掲載した。また現代の読者に読みにくい箇所は、最小限の範囲で直ささせていただいた)。

もともと建築にたずさわる人々へのレファランスとして企画されたものであっても、これだけのボリュームを、このような編集で世に出すにあたって、彼は明確に意識していたにちがいない。時代のリアリティは、有名作家や作品ではなく、街にあふれる無名の建築と、無名の人々によってこそ、表現されるべきものであることを。

北尾よりも40年近く前に生まれ

たウジェーヌ・アジェが失われゆくパリを、北尾より2年あとに生まれたベレニス・アボットが変貌するニューヨークを記録しつづけたように、北尾は日本の都市生活の風景を淡々と、執拗に記録しつづけた。それも京都、奈良のような歴史都市ではなく、戦争によって徹底的に破壊され、再生する過程をつぶさに見てきた東京や大阪ばかりを。

戦前、すでに建築家として活動し、戦中はシンガポールで軍属として働いた北尾にとって、眼前に展開する都市の変貌は、日本という敗戦国が息を吹き返すエネルギーそのものだったろうし、その命のはかなさ、いまあるこの風景もいつか失われていくだろうという確信も、そこにはあったはずだ。さらに言えば、そのように変貌していく街並みを、だれかが残しておかなくてはならないという使命感も。それもあくまで作品ではなく、記録として。

145冊に及ぶ膨大な写真集のペー

ジを綴っていると、北尾が半生をかけてつちかった建築と調査研究のスキルは、このような「時代感覚の収集」のためだったのではないかとすら思えてくる。そして昭和31年に生まれて、まさしくこの時代感覚の中で育った僕にとって、本書に閉じこめられた空気感は自分の少年時代そのものであり、だからこそたまらなく愛おしい。

判型こそ本書と同一サイズだが、オリジナルの建築写真文庫は、各冊が100ページに満たない薄手の上製本である。本書に収められたのは、当然ながら商業・公共建築系79巻のうちの、ほんの一部分にすぎない。いまでも古書店の店頭やウェブサイトで、オリジナルを見つけることは難しくない（全巻セットを揃えるのはおそらく不可能だが）、本書に興味を持たれた読者は、ぜひオリジナルの文庫も探してみしてほしい。造本、デザイン、印刷、すべての面で、それは懐かしさにあふれていな

がら、いま見てもスタイリッシュでクールな写真集である。

いま、ファッショナブルなショッピング・エリアに並ぶファッショナブルなショップ群に、いったいどんな魅力があるだろうか。巨大ブランドが、その土地となんのゆかりも、なんの思い入れもない有名建築家を雇って、その土地にもひとびとにも、なんの接点も引っかけりもない「建築作品」を乱造しては、また壊していく。そこにあるのは資本の論理だけであって、売る側と買う側、作る側と使う側の交流でも、商売のよろこびでも、よりよい暮らしの夢でもない。

建築写真文庫の最終巻が出版されたのは1970年、大阪万博が開かれた年である。ジミ・ヘンドリックスとジャニス・ジョプリンがドラッグで命を落とし、三島由紀夫が割腹自殺し、赤軍派がよど号を乗っ取って、あしたのジョーになろうと北朝鮮に向かったその年に、大阪のはずれで

は「人類の進歩と調和」をうたった、ほとんど陽性の狂気のごとくハッピーな気分にあふれた万国博覧会が半年も開催され、6400万人以上の入場者を集めていた。明るい未来がかならずやってきて、建築がそのためにかならず役立つという、いまでは幻想でしかない思いこみを全世界が共有できた、それは最後の万国博覧会だった。

1970年、僕らのうちで、なにかが死んだのだ。

ひとびとの暮らしと建築デザインが幸福感覚をともにできた古き良き時代の、もっとも身近で、もっともリアルな記録。それが建築写真文庫なのかもしれない。

都築響一

SHOWA STYLE—まちかど建築遺産・14
北尾春道さんのこと—後記にかえて・778

目次

1章 遊園地・映画館・劇場……………20

遊園地施設：40巻
映画館：80巻
映画館と小劇場 41巻

2章 喫茶店……………70

和風喫茶店：1巻
和風喫茶店 2 32巻
和風喫茶店 3 96巻
和風喫茶店 4 133巻
洋風喫茶店：4巻
洋風喫茶店 2 18巻
洋風喫茶店 3 58巻
洋風喫茶店 4 72巻
洋風喫茶店 5 97巻
洋風喫茶店 6 134巻
コーヒースタンド 99巻

3章 レストラン・料理店・料亭……………176

スタンドキッチン：98巻
レストラン：2巻
レストラン 2 74巻
レストラン 3 142巻
洋食店：100巻
飲食店：68巻
小料理店 28巻
小料理店 2 93巻
小料理店 3 138巻
料亭の玄関：9巻
料亭の座敷 8巻
料亭・旅館の調理場 46巻
おしや：94巻
そばや：95巻
のみや：92巻

4章 バー・ナイトクラブ・ キャバレー……………290

バー：30巻
バー 2 53巻
バー 3 91巻
バー 4 121巻
バー 5 137巻
ナイトクラブ：15巻
キャバレー：14巻

5章 ホテル・旅館・クラブ・ 温泉・ガソリンスタンド……………378

ホテル：62巻
クラブ：63巻
温泉浴場 66巻
公衆浴場 38巻
旅館 61巻
旅館の客室と宴会場 13巻
旅館の設備 65巻
ガソリンスタンド 90巻

6章 事務所・学校・スタジオ・ギャラリー・ 寺社仏閣・墓碑と記念碑……………484

事務所 81巻
各種学校 82巻
保育所・幼稚園 89巻
体育館 86巻
寮・アパート 69巻
スタジオ・教室 42巻
ギャラリー 39巻
出入口 85巻
新しい神社・寺院 71巻
墓碑と記念碑 64巻

7章 医院・理髪店と美容院……………554

医院：67巻
医院 2 125巻
医院 3 145巻
理髪店 115巻
美容院 114巻
美容院と理髪店 17巻
美容院と理髪店 2 144巻

8章 専門店舗とその意匠……………622

看板と広告塔 75巻
店舗のファサード 31巻
看板の意匠 29巻
店頭の意匠 1 130巻
店頭の意匠 2 141巻
ショーウィンドウ 78巻
ショーウィンドウとショーケース 49巻
専門店舗 3巻
専門店舗 2 79巻
売店 44巻
洋品店 112巻
装身具・化粧品店 118巻
薬局 113巻
靴店 111巻
時計・貴金属・眼鏡店 116巻
せともの・ガラス器具店 119巻
電気器具店 117巻
カメラ店 120巻

収録巻『建築写真文庫』一覧……………12
収録写真の掲載原本リスト……………784
『建築写真文庫』全巻リスト……………793







電飾、工芸デザイン、建築装飾を総合して最もはなやかに、昼はその構造美と意匠文字によって大衆の視覚神経をひきつけ、日没とともに夜は七彩のネオンに動的な放光、走行する光の変化、廻転とともに明滅する抽象的な図案と文字は、商店街や繁華街を問わず街の広場、鉄道の沿線、段丘を背景とし、見晴らしのよい高台などに、あるいは高層建築の屋上をさらに高く、空をかすめてそびえ立つものに、広告塔と看板がある。近代の商業美術は大衆の視覚と聴覚を吸引して、空高く都市の空間に活気よく画きだされている感がある。

